

式 辞

本日、公立大学法人山陽小野田市立山口東京理科大学工学部各学科へ入学された皆さん、大学院修士課程、博士後期課程へ入学された皆さん、おめでとうございます。山口東京理科大学を代表して心からお祝いを申し上げます。

また、今日まで、すべての面で支えてこられました御家族の皆様及び関係者の皆様に、心からお祝いのご挨拶を申し上げます。

さらに、本日ご多忙の中、ご列席を賜りました、御来賓の皆様にも、本学を代表致しまして篤く御礼申し上げます。

山口東京理科大学は昨年四月一日より公立大学法人下の大学として新たな一步を踏み出し、皆様のおかげをもちまして、最初の一年を無事終えることができました。

しかし、ここに至るまでには多くの方のご努力がありました。平成二十六年十二月に、学校法人東京理科大学と山陽小野田市が本学の公立大学法人化に合意、平成二十七年八月に公立大学法人設立の申請を行い、同年十二月に公立化の認可を頂き、平成二十八年四月に公立大学に移行いたしました。この大学の存続を願う多くの方々のおまさに献身

的なご支援、があったからこそ今の本学があります。

そして、さらに来年四月には薬学部を新設する予定です。現在、キャンパスの東側の土地に校舎を建設すべく工事が進んでおります。

さて本学の歴史をたどれば、百三十六年前、「理学の普及をもつて国運発展の基礎とする」を建学の精神として一八八一年に設立されました、東京理科大学の前身、東京物理講習所に起源を發します。

その精神を受け継ぎ、一九八七年に本学の前身であります東京理科大学山口短期大学が開設され、一九九五年に四年制大学へと転換、昨年、設立母体が変わり、公立化した山口東京理科大学として現在に至っております。この間、確かな基礎技術力を身に着けた、地域産業界で活躍する人材を育てることを目標に努めてまいりまして、二十二年になります。四年制大学となりましたからの卒業生は二千人に及び、地元産業界を中心に活躍しております。そもそも東京理科大学の教育の真髄は工学や科学技術の現場でしっかり活躍できるだけの力を会得したもののだけが卒業できる「実力主義」にあります。これこそが、理科大を卒業

した技術者や理系人材が社会の様々な場所で高い評価を頂いているゆえんであります。本学も、理科大のこの崇高な方針を継承して今後も社会の諸課題の解決に向け、十分な実力を有する人材を育てていくことに変わりはありません。

同時に、公立大学としての、公正・公平性と透明性の大学運営を心掛け、本学に期待される地元、山陽小野田市や山口県の地方創生を推進すべく、地域に根ざした大学づくりを行っていかねばなりません。

さてこうした時代や社会の変化と共に変遷してまいりました本学ですが、これから新たな勉学や研究の道を志す皆さんに、二つのことを申し上げたいと思います。

ひとつめは、『大学はそれ自体が目的ではなく、将来の目標を達成するための手段であり、通過点である』ということとであります。

皆さんの中には念願かなって本学に入学したという人もあれば、当初の希望には添えずに、この学校に来たという人もあると思います。本年も志願者が多かったので、希望

がなかった人が多いかもしれませんが、毎年、希望通りにならなかった複雑な思いを抱(いだ)いてこの学校に入学する人たちもおります。

努力を重ねてせっかく大学に入ったにも関わらず、気持ちの整理ができていない学生の皆さんに、私は問いかけます。

「あなたの本当の人生の目標、目的は何ですか」と。

将来の夢、ありたい姿、希望、それを生きる目的とし、学ぶことの目標として心の中に宿すべきです。そして、そこに到達する為の努力、方策、生業、勉強、それらは目的を達成するための手段なのです。

すなわち、入学した大学は皆さんの将来の夢をかなえるための手段に過ぎません。第一志望の大学に入れなかったからと悔やむ必要はありません。悔やむのは、手段を目的と見誤っているのです。

希望通りの大学に入学した皆さんも決して驕ることなかれ、大学や大学院は単なる手段であり、通過点に過ぎません。崇高な目標がもつと先にあるものです。

さあ、大学生になった皆さんは、自分の将来の夢を、成し遂げたいことを、人生で何が大事であるかということを見

つけてください。目的が明確なほど勉学に身が入ります。まだ漠然としか将来を見ていない皆さんがいたら、一、二年生のうちに目標を明確にすることをお勧めします。目標を持てば、たいていの苦労は乗り越えられます。こう考えますと、目標を実現するために入学したこの大学こそが皆さんにとって最高の自分を磨く場になるはずです。

ところで、皆さんはアサギマダラという蝶を知っていますか。この蝶は日本列島のいろいろな場所に見られる旅する蝶です。アサギマダラほど、優雅に飛ぶ蝶はいません。しかも、そのか細い体軀からは想像もつかない力を秘めています。日本列島を縦断して台湾とか南方に飛んでいく旅をする蝶なのです。この街の瀬戸内海側に大学のシンボルともいうべき竜王山という小高い山があります。その中腹のお花畑に秋、わずか十日ばかりですが、沢山のアサギマダラが飛来します。この地に立ち寄って蜜を吸い、しばし休んでからまた南を目指して飛んでいきます。実はこの蝶、一昨年から本学のキャンパスに学生たちが植えたヒヨドリ花にも来るようになりました。

私には、この蝶が学生達にだぶって思えてなりません。

人生の一番、多感な時期にこの地を訪れ、学び、そして飛び立っていく。そして、またいつかこの地に戻ってきてくれる。必ず戻ってきてくれるような場所にしたいと私も大勢の教職員も願い、大学に心の花を育てています。人生の一時期にすぎませんが、この学び舎にとどまる間に、自らの夢を実現するための力を磨くべく、切磋琢磨していただき。皆さんの希望をかなえるべく、私達教職員もこの大学を素晴らしい花畑に仕立てるよう、日々努力することを誓います。

そして、手段としての大学での学び方ですが、何を学ぶのが大切です。

大学という最高学府に通う日々は、心身共に解放された、気力あふれ、人生で一番自由な時期です。このような大学で学べる機会を得られたということは、皆さんは大変恵まれているということなのです。

十八歳人口の半数が大学への進学を選んでいる日本の社会でも、多くの人達がいろいろな事情で大学進学を断念している現実があります。

さらに世界に目を向ければ、七十数億の人類のごくわず

かな人しか大学で学ぶ機会を与えられていないのです。

その機会を得た皆さんが自身の将来のために大学生活を役立たせないでどうしましょう。

本日、申し上げたいもう一つの話は、こうした選ばれた皆さんに与えられた貴重な時間に、『自ら学ぶことを身につけなさい』ということです。何かを学ぶことも大事ですが、『学ぶすべを身に付けてほしい、学び方を学んでほしい』と思います。

私はよく学生の皆さんに、デンマークの哲学者キルケゴールの、老人と渡り鳥の話をしします。皆さんの中にはご存知の方もいらっしゃると思いますが、大切な内容を含んでおりますので、本日も新入生の皆さんにお話ししたいと思えます。

北欧の湖に、毎年、季節になると野鴨たちが渡ってきました。近くに住む老人がはるばる渡ってきた鴨をいたわって、毎日餌を与えるようになりました。野鴨は餌がいつもあり、親切な老人のいるこの湖がすっかり気に入りました。そもそも野生の渡り鳥は同じ場所には住み着かないも

ので、季節が過ぎると次の土地に向けて遠くに飛び立つ習性をもっています。ところが、この湖の野鴨たちはいつも餌が与えられ、何一つ不自由しないこの土地から飛んでいく必要はないように思うようになりました。そして、野鴨たちはこの湖に住み着くようになりました。

野鴨たちはいつしか苦勞した長旅の記憶を忘れていききました。そんな時、いつも餌を運んでくれ、彼らを、こよなく愛してくれた親切な老人が亡くなりました。その日から野鴨たちは食べる餌に困るようになりました。餌に困って他の土地に飛び立とうとするのですが、どうしたのか飛び立つことができなくなっていました。気が付くと、知らないうちに肥ってしまい、かつて遠くまで飛べたはずの力が全く失われていました。やがて湖に嵐がやってきて周りの山々から激流が流れ込んできました。そして、その激流に押し流されて肥った鴨たちは死んでしまいました。

この逸話の教訓の一つの見方は、容易に餌を与えられるよりも、餌自体を採る方法を身に着けることのほうがはるかに重要だということです。皆さんは、いずれは大学や大学院を卒業して社会に出ていくでしょう。大学や大学院で学ぶ期間の十倍もの時間、この先、社会で仕事をするため

には、新しい知識を学び続けなければならぬでしょう。大学で身に着けた知識は時間とともに陳腐化し、また、様々な仕事には固有の技術や知識を身に着ける必要があります。すぐ役立つものはすぐに役立たなくなるものです。大学時代に学ぶべきことは、すべての基礎となる知識と学び続けるための学ぶ方法です。

ぜひ、学ぶ力を身に着けてください。人生は学ぶことの連続です。人類が今日の文明を築き上げることができたのは、たゆまぬ研鑽の日々の積み重ねの歴史の結果に他なりません。人はひとりひとり、生きていく場所で一生、いろいろな形で学ぶことを続けなければ進歩はないのです。

私が本日ここに申し上げたふたつのことをもう一度まとめると、『大学はそれ自体が目的ではなく、将来の目標を達成するための手段である』ということと、そこで『学ぶべきは生涯にわたり学び続けるためのすべを身につけること』です。

さて、皆さんがアサギマダラのように人生の途中で舞い降りてきてくださったこの山陽小野田市は、「しあわせ」

が手に届くところにある街です。若い皆さんの今は、「みらい」が手に届くところにある年頃です。そして、皆さんが入学した山口東京理科大学は、「きぼう」が手に届くところにある大学です。

どうか、健康に留意され、今の初々しい気持ちを忘れずに、しっかりした目標を形成し、それを目指して存分に学んでください。皆さんが、有意義な学生生活を過ごされま

すことを願って、式辞といたします。

平成二十九年四月八日

公立大学法人 山陽小野田市立 山口東京理科大学長

森 田 廣